

今日は8時半に集合し、農業省の方が私たちの宿泊しているGreen view lodgeまで稲作農家の案内のために迎えに来ていただきました。フィリピンを代表する乗り物にジプニーという乗り合いタクシーがあるのですが、それに乗って稲作農家を営んでいるビリー・アナさんを訪問することになりました。バナウエは、世界遺産にも登録されている棚田が有名な場所です。私たちが乗るジプニーは車体の屋根の上にも座席があって乗ることができ、私たち学生は喜んで屋根に乗りました。一方で、冷めた様子の教授たちは普通に車体の中に入り込んでいました。



ジプニーに乗って稲作農家へ向かう

到着後は農家さんから温かく歓迎され、稲作をどのように行っているか、一年周期で説明を聞くことができました。そこでは米の収穫期が6-7月であること、収穫の方法は機械が入らないため全て手作業であること、作業員は10人以上で女性が多いことなどを写真付きの資料を交えて説明を受けました。現在は既に収穫は済んでおり、次の稲作に向けての準備期間とのことでした。



稲作農家のビリー・アナさんを訪問

ここでは栽培する米にも赤米や紫米等数種類あり、それらは自分たちの食用のほかにもアメリカなどへ輸出しているとのことでした。米はそれぞれの品種により適した用途が異なり、紫米はライスワイン生産に適しているそうです。輸出については、アメリカにはフィリピン人のコミュニティが多数あるため、フィリピン米が好まれるためアメリカへ輸出しているということです。他にも年ごとに余った分のお米は国内市場へ輸出しているとのことで、バナウエの中でも優秀な農家さんのように感じられました。私たちはそれぞれがこの海外実習でテーマを設定しており、話を一通り聞いた後は質疑応答で各自のテーマに沿った活発なやりとりが交わされました。バナウエの棚田における稲作農家は後継者不足に悩んでいるという情報を事前に得ていたのでそれに関して質問をしました。バナウエでは家族単位での農業を行っているところが多く、そうになると後継者は次世代の子供となります。しかし、近年では農業を継ぐことを嫌う子供が街へ出ていくため、棚田の存続が危ぶまれているとのことでした。これに対し、フィリピン政府は棚田存続のために

補助金を出してはいるものの、そうすると棚田の景観を維持することで補助金をもらって生活ができるために稲作の実態がないという別の問題が発生しているということも知りました。

農家の訪問が終わった後は、ユネスコの世界遺産にも登録されている、バタッドの棚田を訪問しました。まだ車が通行できる道路がないため、道路の終点から急こう配の山道を30分くらい歩くと小さな集落があり、宿泊施設やレストランが切り立った傾斜地にはりついています。そこから棚田を一望することができました。その景色は言葉では表せないほど美しく、歓声をあげるほどでした。

昼食後は実際に棚田へ探索に行くことになりました。棚田の様子を身近で観察するために、棚田の一番奥の絶景ポイントに行って折り返すというものです。その道中では驚くことにお土産屋さんもあり、山間の小さな集落だったものの観光業が比較的盛んな地域のようなものでした。絶景ポイントまでの道は左右に狭く細い道で、棚田の間を縫うように移動しました。絶景ポイントではレストランから見た光景とは違う角度で棚田を一望することができ、こちらも息をのむほど美しい光景でした。残念なことに、このころから雨が降り始め、帰り道は雨に濡れながらぬかるんだ道をたどって戻ることになりました。



バタッドの棚田にて

そこから教授たちと合流し、ジプニーが待つ舗装された道路まで再び山道をたどって戻りました。道中、岸本先生が急な坂道で息絶え絶えでしたが、どうにかたどりつくことができました。

雨が続けていたので、ジプニーでは屋根の上に行きのように乗ることはできず、ジプニーの中に入って帰路につきました。山道を長時間歩いて疲れたせい、私たちのほとんどはうとうと寝ていました。ホテルに着いてからは、夕食をとりましたが、運動したせい、いつもより数倍フィリピン料理がおいしく感じられました。

今日の活動を通じて感じられたことは、「棚田」と一言と言っても実態が地域ごとに異なるということです。最初に訪問した農家では、稲作を実際に行い、翌年に向けて稲を刈ったり水田を整備したりと実際に農業をやっていることが伝わってきたのに対し、山道を通って見てきた棚田は雑草が少し伸びている場所があったり稲を刈ってなかったりと午前中に訪問したビリー・アナさんの所と比較すると、あまり生活感が伝わってきませんでした。もしかすると、その土地は景観維持のために雑草が伸びすぎないようにしているだけの休耕地だったのかもしれませんが。棚田の景観を維持することで、補助金で生活している農家さんもいたのかもしれませんが。この部分は詳しく話を聞く機会が得られなかったのではっきりとはわかりませんでした。

海外実習も8日目で、折り返し地点となりました。今日はベンゲット州立大学(BSU)の学生とExchange programを通して交流しました。

BSUは首都マニラから250kmほど離れたバギオの隣、ラ・トリニダードという街にあります。農学部から始まった大学で、科学、教育学、家畜、食品や経済など畜大でも身近な研究テーマを中心に19の学部があるととても規模の大きい大学です。私たちは昨日からBSUのメインキャンパス内のドミトリーに宿泊しています。

昨晩は今日の交流会のための準備とファイナルプレゼンの準備等々で遅く、だいぶ疲れが見えているように思いましたが、プログラムが始まるといつもの賑やかさを取り戻しました。

昨日までの活動では施設の方にお話を聞くことが中心だったので、同年代の現地の学生と関わる機会は出発前からとても楽しみにしていました。今回、私たちの専攻にあわせて副学長のミリステラ先生が国際交流に興味のある学生を募り、会をセッティングしてくださいました。貴重な機会をいただけて、本当に嬉しく思います。

プログラムは、初めに畜大の紹介をしてその後お互いを知ること兼ねてアイスブレイキングを行いました。まずペアを組んでのパートナーの紹介です。パートナーの性格をその国の言葉で表すという楽しいルールもあり、距離がぐっと縮まりました。私のパートナーは栄養学を専攻している4年生で19歳のKimでした。フィリピンでは高校がなく、中学校の後すぐに大学に入るため同じ年でも学年が2つ上になります。このようなことを初め、フィリピンについて色々なことを教えてくれました。自分を一言で表すならばという私の問いに対して彼女は自分の言葉で”Tahimic”な性格だと言っていました。日本語ではおしとやか、もの静かという意味です。

タガログ語はフィリピンで話されている言葉です。恥ずかしながら私はこの海外実習のための授業を受けるまでタガログ語を知りませんでした。フィリピンの公用語は英語ですが、現地人はコミュニケーションにタガログ語を使います。歴史的な背景として、フィリピンは16世紀はじめから18世紀の終わり頃までスペインから植民地支配を受けていました。そのため、フィリピンで話されるタガログ語はスペイン語と同じ意味の単語などもあり、かなり似ているように感じます。現地で海外の友人の言葉を知ることができてよりいっそう距離が縮まったように感じました。



ドミトリーの歓迎の横断幕



BSUの学生と記念写真

その後のゲームは日本でおなじみのフルーツバスケット、ジェスチャーゲーム、BSU の学生が考えてきてくれた“First Impression”という相手の第一印象を書いて皆に紹介するというゲームをしました。

午後は Baguio Botanical Garden という 植物園やバギオの公園や市街地を歩きました。Baguio Botanical Garden は、観光地としても有名な植物園です。車社会のフィリピンは排気ガスなどで空気が良くない所もあるため、植物園周辺のきれいな空気で現地の人もいやされているのではないかと思います。園内は南国の花々が沢山植育てられていて、散歩に最適でした。少し奥まで行くと韓国や中国風の東屋があり、観光客を楽しませていました。その一角には大きな鳥居があり、その先に第二次世界大戦中に日本軍に病院として使われた防空壕跡がありました。植物園のあるバギオは元々日本人労働者が多い街でしたが、第二次世界大戦で激戦となった土地でもあります。遠いフィリピンの土地で2国間の歴史について学びました。今でこそ移動は自由になりどこへでも行ける時代ですが、訪れる国と母国との関係は知っておくべきであると感じました。

植物園を後にし、市街地の中の公園へ向かいました。ボートに乗ったり、写真をとったり今日初めて会ったとは思えないほど沢山話をしました。英語でのコミュニケーションに不安は少しありましたが、その心配は無用でした。私たちはとても楽しい時間を過ごしました。それも普段英語を話さない私たちの英語の意味を拾ってくれた皆のおかげです。なかなか伝えたいことを言葉にするのは難しくもありましたが、英語の勉強をもっと頑張りたいと強く思いました。

夕飯の前には BAGUIO CITY PUBLIC MARKET という巨大なマーケットに行きました。例えるならばアーケードのある屋台街という感じです。このような大衆向けのマーケットをウェットマーケットと呼びます。生鮮食品を多く取り扱っていて床が濡れていることが語源です。

日本では見られないような珍しいフルーツや野菜が山盛りで売られていて人々の生活を知ることができたほか、農作物の販売や食文化など非常に勉強になりました。マーケットは現地の人で賑わっていて、人の間を縫って進まなければいけないほどでした。近隣市民の生活にかなり根付いているマーケットであると感じました。また日本人向けのウェブサイトにもこのマーケットが掲載されているなど、異文化を感じられる観光地としても人気があるようです。

楽しい時間はあっという間で、早くも夕食の時間です。明日も私たちは BSU に滞在しますが、BSU の学生は授業があるようで、会えるのは今日限りであるかもしれないと思うと寂しいです。そんなことを思いながら夕飯を食べ、私たちはお互いの言語について話しました。お互いの言葉での数の数え方や挨拶、自己紹介など沢山の言葉を知りました。次に会うときには少しでも多くの言葉を覚えて話がしたいと思います。タガログ語も日本語もお互いにとってはきっと難しいですが、言葉が違うことは全く障害ではなく、新しいこと、またお互いを知ることができる良い機会となりました。この素敵なプログラムに参加することができ、また素敵な友人達に会うことができ本当に良かったと思います。



市民公共市場

今日はベンゲット州立大学(以下 BSU)の表敬訪問と、大学内及び近郊の施設を見学する予定です。8 時 15 分にホテルのロビーに集合し、そこから徒歩で BSU に向かいました。BSU の建物のエントランスには帯広畜産大学を歓迎する看板と日本の国旗が飾ってあり、BSU の友好的な歓迎に心が温まりました。

この時学長は大学創立 100 周年の記念式のために多忙で不在でしたが、代わりに昨日の交流会でもお世話になった副学長のメレステラ先生が出迎えてくださりました。学長室でお話をした後、会議室に移り大学紹介ビデオを見ました。この時頂いた BSU の T シャツはこの後向かう市場で学生全員が早速着衣し、この T シャツを着て今日 1 日しました。

午後の学長への表敬訪問で再度学長室を訪れるまでの時間は大学内の施設見学です。最初に大学内のイチゴ農園に行きました。到着すると大きなイチゴのモニュメントがあり、柵から下を覗くと一面にイチゴ畑が広がっていました。バギオは高地にあるため熱帯のフィリピンでも涼しい気候です。イチゴは高地で育てるのに適した農作物であるためバギオはイチゴに適した土地のため、バギオではイチゴを特産品にしようと活動しているそうです。現に昨日訪れた Botanical Garden や Camp John Hay のお土産屋ではどこでもキーホルダー、帽子、マグネットといったイチゴの売り物や、市場では山盛りに積み重ねられたイチゴを見ました。奥にある畑は技術普及の目的で農家の方に貸し出し、畑もイチゴだけでなく棚で栽培されるイチゴの養分を利用して棚の下でレタスを育てており、育て方や技術普及への意欲を感じました。

イチゴ農園の後は近くにある野菜の卸売市場に行きました。この市場は野菜の卸売市場としてフィリピンで最大の市場だそうです。この卸売市場に生産地からトラックで野菜が運び込まれ、ここで調製された後野菜はマニラといった都市に輸送されます。市場にはたくさんのキャベツやジャガイモなど様々な種類の野菜がつまったトラックがあちらこちらにあり、市場内には運び込まれた大量の野菜、傷みが原因で取り除かれたキャベツの葉の山、規格外ではねられた大根などを見ました。フィリピンでは野菜を輸送するときトラックに隙間もないほど山積みにするため、卸売市場

に着いた時には下の野菜は傷んで腐り、野菜の表面も激しく傷んでしまいます。キャベツを例にすると、卸売市場では傷んだキャベツの表面の葉を取り除き、一回り小さくなったキャベツを新聞紙でくるみ、袋に隙間なく詰めます。さらにその袋をトラックに山積みにして、都市に輸送します。この時の輸送でも野菜は傷み、さらに渋滞の中を常温で輸送するため、さらに下に置かれた野菜は傷んで腐り、マニラ



一面に広がるイチゴ畑



卸売市場で表面の葉を取り除かれたキャベツ

でまた傷んだ葉をとられてとても小さな球の状態で売られます。このようにフィリピンでは食物輸送時に深刻なフードロスが発生しており、この輸送時の問題とフードロスについては私たちのフィリピン最終プレゼンテーションでも取り上げる問題です。そのため卸売市場でその現状を観察することが出来て、非常に勉強になりました。

市場の後はBSUのInstitute of Highland Farming Systems and Agroforestryを訪問しました。ここでは有機栽培でのコーヒーについて研究しています。コーヒーの実は11月から3月にかけて収穫されるため、訪問時見ることはできませんでした。日本のコーヒーはKoreanタイプだそうで、ここでは主に気候に適しているArabicコーヒーを栽培、研究し、研究後のコーヒーは販売するそうです。さらに農家対象のコーヒー栽培技術普及、養蚕、Natural ParkやMini-Museumの設置、Native Animalの保護計画などの活動も行っています。訪問内では案内して頂いている所長が3種類のコーヒー豆を見せてくれました。小さくインスタントコーヒーに使われる味の強いロブスター、大きく丸い形状をした匂いの良いオブロング、さらにシベットキャットの糞からとれる高級なコーヒー豆も見せていただき、このロブスターとオブロングをブレンドすると匂いが良く味も強い美味しいコーヒーになることを教わりました。コーヒー豆をローストする機械も見学しました。ちゃんとローストされているかはロースト時の音、見た目、そして匂いで見るそうで、機械周辺にはコーヒーのいい香りが漂っていました。コーヒーの木は植えてから2~3年で収穫できるようになり、それから10年間収穫できるそうです。

続けてコーヒー農園横のNatural Museumも見学し、博物館内のコーヒー展示スペースにはコーヒー豆の保存だけでなく様々なコーヒーの品種の実と葉も保存してあり、様々なお店のカップ、コーヒーを沸かすヤカンとガス、コーヒー豆の袋なども展示してありました。私たちが知っているNescaféの袋やスターバックスのカップも置いてあり親しみを感じただけでなく、コーヒーについての資料を細かく保存している姿にコーヒーへの熱意を感じました。その後は外に出て、山に設置されている階段を上っていき、実際にコーヒーの木やティラピアのいる池、Native Animalを見に行きました。

15時ごろ学長との表敬訪問のためBSUに戻ると、エントランスに昨日交流会で親しくなった学生が迎えに来てくれました。幸運にもこの時間帯に都合がよかった学生がわざわざ私たちとの交流のために時間を割いてくださり、会うことが出来てとても感激です。

再度、学長を表敬訪問しました。学長のカロラ先生は森林学でとても有名な先生で、BSUだけでなくフィリピン大学ロスバニョス校(UPLB)でも理事をやっている方です。お話を聞いていると学業や大学の活動に非常に意欲的で、私達が着ているBSUのTシャツにも反応してくださるとても友好的な方でした。対談中カットフルーツとお水を頂き、お菓子ではなくフルーツが出てくる所にフィリピンの異文化を感じました。

表敬訪問後は、大学内を案内してもらいました。動物科学や経済学の校舎、有機農場などを見て、初の街内でのジプニーに乗り、朝に行ったイチゴ農園に行って戻ってきました。この時にも学生とたくさんお喋りをし、一段と仲良くなりました。仲良くなった分別れるときは非常に寂しいものです。

明日はバギオを去り、ロスバニョスに戻ります。いよいよフィリピン最終プレゼンテーションも近くなってきました。各人焦りがみられていますが、気を引き締めて残りの滞在を有意義に過ごそうと思います。

今日はフィリピン大学ロスバニョス校 (UPLB) での最終発表の日です。2週間かけてルソン島の様々な地域を訪れ、新しい発見や異なる点、課題を見つけることが出来ました。

私たちは朝6時に友達に起こされて、発表用の原稿を作成しました。スライドは昨日である程度完成していたのですが、終わっていない学生は、朝の3時に起きて作成していました。それから、8時に1階のロビーに行き、先生にスライドや原稿のチェックを頂き、訂正して、完成したのは11時頃でした。ホテルを出発する13時50分まで、パンをかじりながら、原稿の音読と単語の発音をチェックし、8分で終わるように何回か練習しました。

13時50分にホテルを出発し、UPLBでの発表の会場となる食品科学の教室には14時頃に着きました。発表のファイルをパソコンに移し、デニス先生の挨拶が終わると、最終発表が始まりました。

会場にはデニス先生の授業を受けている学生とUPLBの先生方がいらっしゃいました。全体の発表テーマは“Harmonization of economic development and environmental protection”で、日本語では「経済発展と自然保護の調和」です。フィリピンの経済・生活の発展、その傍らに他の生物と共存していくか、環境に及ぼす影響を考えることの重要性を今回の私たちの最終プレゼンテーションで伝えていければと考えました。

発表者とタイトルは以下の通りです。

- ① 小林 将 「農業経済における米農家」
- ② 青木 梨紗 「水牛を使った乳生産の拡大」
- ③ 猿渡 夕貴 「フィリピンにおける乳消費」
- ④ 戸田 萌子 「野菜の流通時でのロス」
- ⑤ 大石 文子 「米不足の危険 ～食料廃棄の減らすには～」
- ⑥ 田口 ひよこ 「経済発展における森林と生物多様性との関係」
- ⑦ 肱岡 建徳 「フィリピン鷲を例とした野生動物保護の重要性」
- ⑧ 大平 まどか 「環境教育の結果」

前半はフィリピンにおけるコメ農家の現状を説明し、所得を上げる方法として、水牛に着目しました。水牛は水田を耕すためにフィリピンで長年使われてきました。しかし、農業の機械化により水牛の利用が減りつつあります。そこで、水牛を乳生産に利用して、乳生産を向上しようと考えました。乳生産を行うことで、国内の乳製品の自給率を上げるだけでなく、農家の収入を上げることが出来ます。水牛での乳生産を行う上で繁殖や牛舎の環境が乳量および乳質の向上、水牛の成長促進やストレスフリーに関わる事、消費では牛乳の栄養価及び消費を拡大する上で中央ルソンでは水牛を伝統的に利用しているため、水牛を使うのが向いている。また、ルソ



発表会の様子

ン島北部では山間部のため、高地にも対応できる山羊を使うなど地域にあった乳生産が必要だと発表しました。流通では、野菜の運搬におけるロスについてでした。フィリピンのスーパーマーケットを訪れたとき、野菜が小ぶりのものが多い印象でした。移動時や卸売市場を見たとき、キャベツをジブニーに潰れるほど載せている光景を見ました。そのため、キャベツの葉が傷み、中間地点で傷んだ部分を剥くのを繰り返すうちに小ぶりになり、多くの部分が損失してしまいます。前半最後は、コメ不足と食料廃棄に着目して、コメの生産を増やすのではなく、消費を減らす必要性を発表しました。レストランに行ったとき、ご飯の量が一律で、残している人をかなり見かけました。解決策としてはご飯の量を選べるようメニューに記載することです。大食いの人は大、小食の人は小と選べるようにしたら、食事中の食料廃棄を減らす事が出来ます。

後半はフィリピンの自然に着目し、害獣被害、絶滅危惧種の保護、環境教育の重要性について発表しました。最初に害獣被害についての発表でしたが、現地で調べた結果、日本では害獣となるシカはフィリピンでは先住民族の狩猟対象となっており、害獣被害は少ないとのことでした。また、山を人間の居住地が占領しているので動物の生息地が奪われているの也有ります。絶滅危惧種に関してはフィリピン鷲について説明し、鷲が絶滅すると生態系が崩れる危険性を説明しました。日本でのニホンオオカミを例に挙げて、シカを保護するためにオオカミを絶滅させた結果、シカの頭数増加により、シカによる農作物の被害が増えたと発表しました。日本がやって失敗したことが、フィリピンで起こらないためにも鷲の絶滅を防ぐ必要が重要です。環境教育では、アンケートは大学生で受けた人が多かったですが、JICAで聞いた話で、子供たちが両親に環境の大切さを劇にして見てもらう活動から、子供の時から学び伝えていく重要性を発表しました。

発表後は、UPLBの学生と交流会を行いました。私たちにとっては遅めの昼食、UPLBの学生にとっては早めの夕食です。参加していただいた学生は、食品科学の4年生でした。圧倒的に女子生徒が多かったので、男女比を聞いたところ、大半が女子とのことでした。他には、お互いの国で好きな食べ物やポケモン、ジブリの話をしました。話し終わったら、みんなで記念撮影です。フィリピンの学生は写真を撮ることが好きで、発表前にもクラスの皆で撮っていました。ちなみに、写真のポーズでおなじみのピースサインは、フィリピンでは日本ポーズと言われています。他にも、韓国ポーズは親指と人差し指でハートをつくるらしいです。



UPLBの学生と記念撮影

そのあと、発表の反省会をしました。UPLBのインターンシップを受けていた畜大4年生の先輩と研究に来ていた東京農大の学生2人も加わりました。反省点はありますが、発表が終わったことが何よりもうれしかったです。明日はフィリピン最後の一日です。少ない時間ですがフィリピンを満喫したいです。